

# としょかんだより 第104号

2016年 8月開館予定表

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	28	30	31			

2016年 9月開館予定表

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	

	9:00-20:00		9:00-17:00
	13:00-20:00		13:00-17:00
	休館日		9:00-19:00

## 発行所

〒648-0280

和歌山県伊都郡高野町  
高野山 385  
高野山大学  
図書館閲覧室

T E L : 0736-56-3835  
F A X : 0736-56-5590  
twitter : @koyasanlib  
E-mail  
service-lib@koyasan-u.ac.jp

## 図書館よりお知らせ

利用者の中で資料を延滞する方が増えています。図書館の資料がより多くの方にご利用していただけるよう、延滞者の方は貸出を停止するペナルティ制度を復活します。

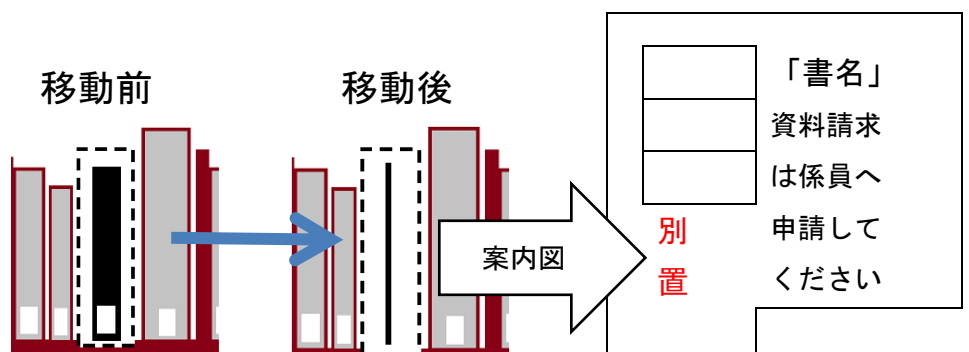
### ペナルティの基準

学生・一般	教職員
延滞期間：2週間以上	延滞期間：1カ月以上

※延滞図書は返却があればペナルティは解除されます。直接図書館へ返却に行けない場合、郵送可能です。返却できない場合、再貸出や貸出延長をお願いします。今年度後期授業開始日より開始しますのでご協力をお願いします。

## 資料の移動について

書庫狭溢化対策のため夏期休暇中書庫にある貴重書に準ずる資料と入手不可能な資料(真言宗の聖教類)を別室に随時移動しています。別置資料を配置していた場所には案内を配置します。別置き資料を御覧になりたい場合、申請をお願いします。資料の移動期間中ご迷惑をおかけしますがご了承をお願いします。



# 松尾芭蕉

# 佐夜中山にて

高野山大学教授 図書館長 前谷 彰(恵紹)

いのち 命 なり わづか<sup>かさ</sup> の 笠<sup>したすず</sup> の 下 涼み

(句意)

命というのはこれくらいのもなのだ。ほんのわずかな笠の下の日陰で涼んでいるのだから。

(解説)

松尾芭蕉は寛永二十一年（一六四四年）、伊賀国上野赤坂町に、豪農松尾与左衛門と妻ウメの次男として生まれます。若くして主計良忠（俳号・蟬吟）に仕えますが、その後北村季吟に師事して俳諧の道に入りました。一六八〇年に深川に草庵を結び、芭蕉の木を植えたのですが、それが大いに茂ったのでそこを「芭蕉庵」と名付け、芭蕉の俳号はここから来ているのです。しばしば旅に出て、『野ざらし紀行』などの紀行文を残し、一六八九年に弟子の河合曾良を伴っていわゆる『奥の細道』の旅に出て、一六九一年に江戸に帰ります。しかし、その後も旅を続け、最後の旅の途中、一六九四年、大阪は御堂筋の旅籠・花屋仁左衛門方で死去。享年五十一歳。遺骨は生前からの遺言により、大津は膳所の義仲寺（ぎちゅうじ）にある木曾義仲の墓の隣に葬られました。

この句は芭蕉が三十三歳、二度目の帰郷の折に佐夜の中山で詠んだものですが、実は西行もこの地で「年たけて又こゆべしと思ひきや命なりけりさやの中山」と詠んでいます。芭蕉は中山にさしかかった時、西行にあやかって「どうしてもここで一句詠んでおかねば」と思ったのかもしれませんが、でも、さすがは芭蕉。西行の「命なりけり」では、「これも命あってのことだなあ」と命のありがたさを嘆じているだけで、芭蕉は違います。

この句を、「命あってのことだから、笠の日陰で涼んで一休みして行こう」という意味に解釈する芭蕉研究家もいますが、とんでもないことです。

ざらざら照りつける真夏の太陽の下、佐夜の中山にさしかかったが、そこには木陰が全くない。喉は渇き、身体は今にも干涸らびようとしているのに、猛暑は容赦なく襲う。そんな時、芭蕉は笠の下のほんのわずかな日陰で涼みながら必死で息づいている命に気づき、「命とはかくもちっぽなものよ」と感じ入ったに違いありません。命を大切と思う心は、今も昔も変わらないでしょう。現代人はやたらに「偉大なるいのち」なんていうことばを使いたがりますが、芭蕉の時代にはこのような観念はなかったはずで、古人は、「いのち」というものがちっぽけではかないものだからこそ、何よりも大切なものと感じていたに違いありません。そう考えると、句頭の「命なり」という五音からは、ある種の真言にも似た響きを感じ取ることができないでしょうか。